

英心
百物語
前
夜
寫



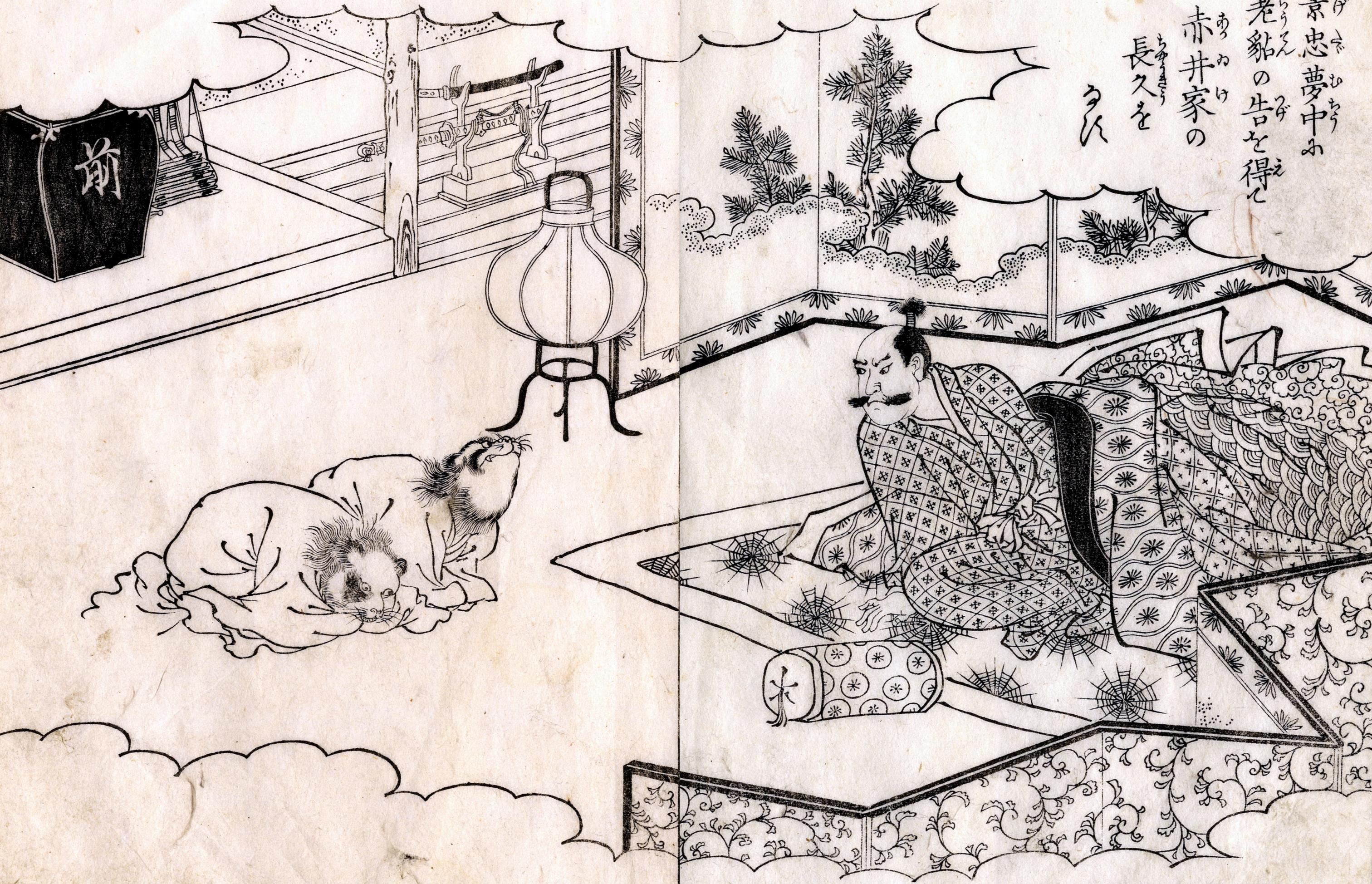


景忠夢中
老猫の告を得

赤井家の

長久を

久



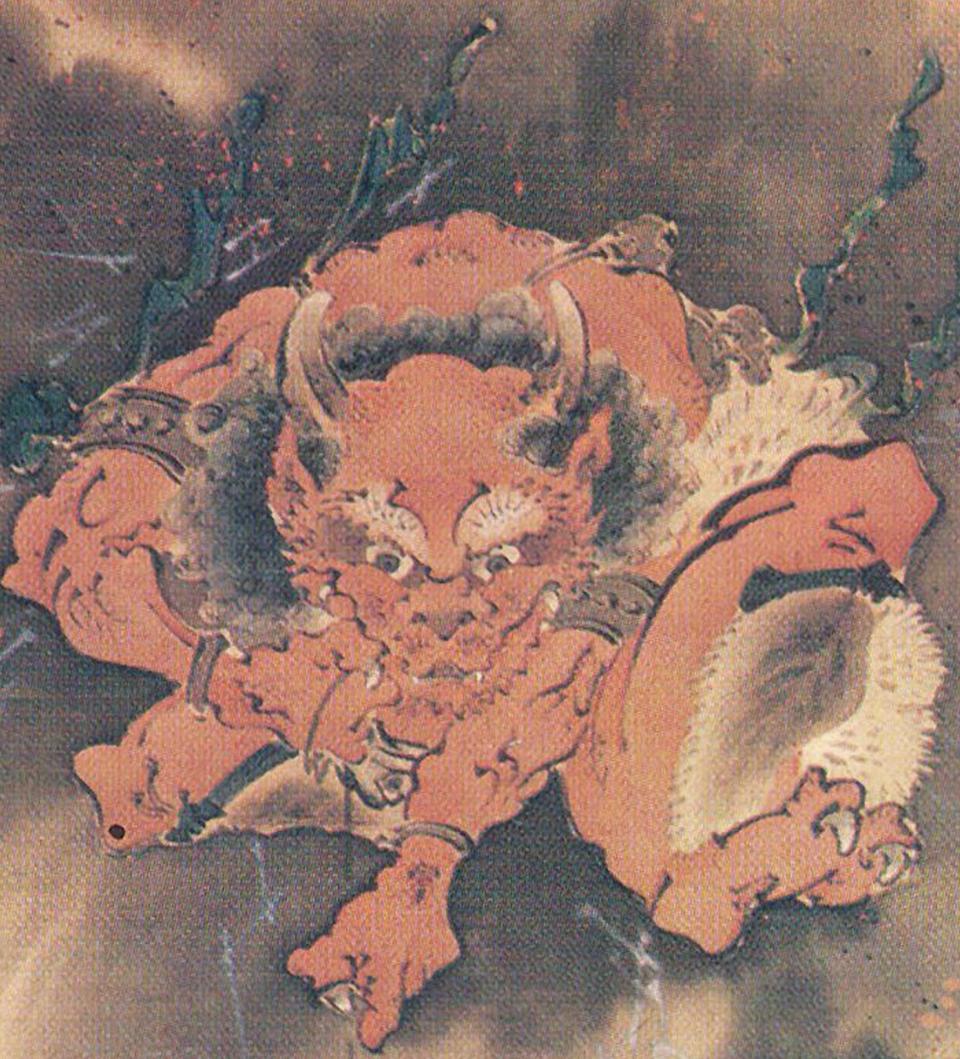
あーがらま
足柄山

怪童九





明
清
畫
卷
三
第
一
頁



惟之世
丁巳





畫
世
不
可
少

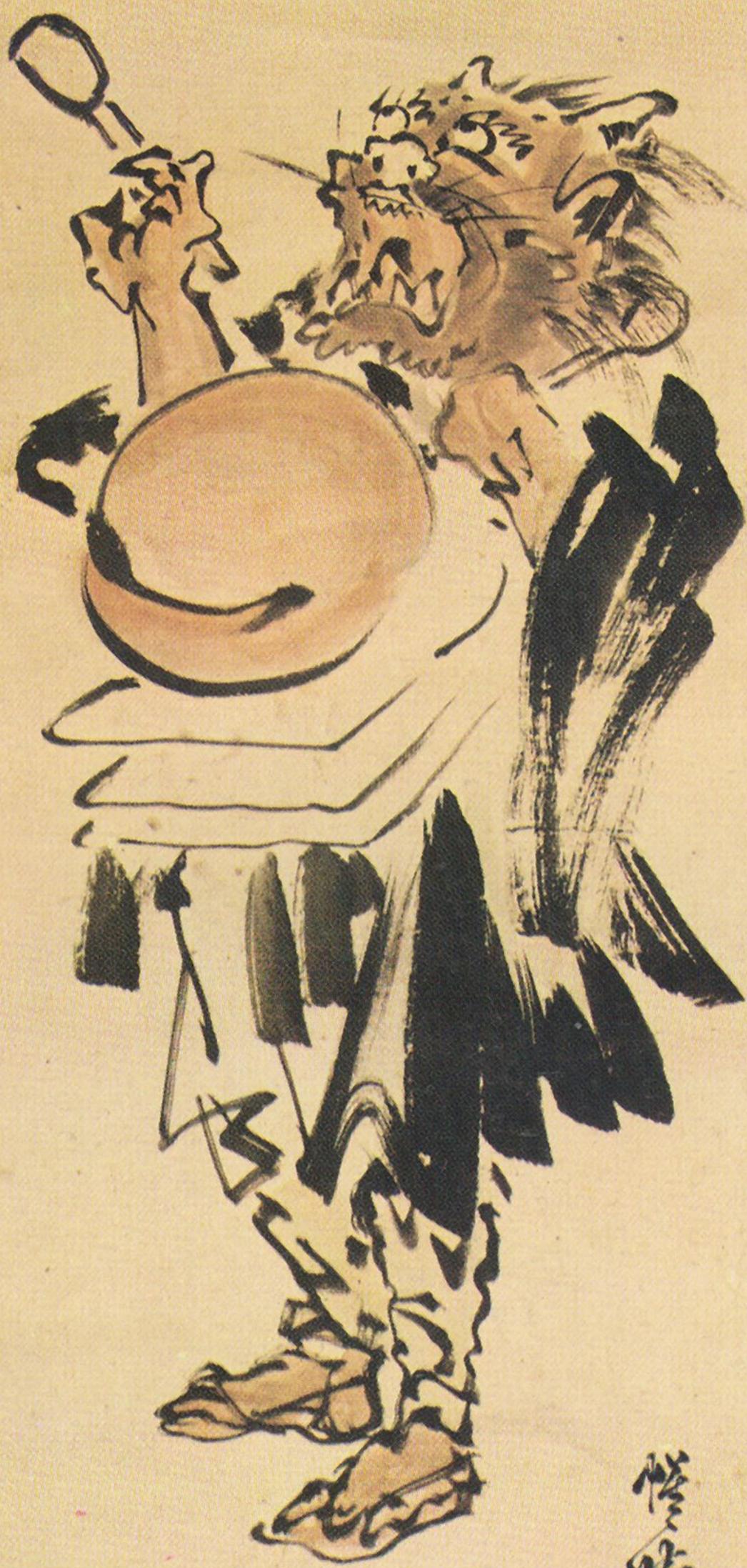
こ
尤
小
平
二
百
物
語
前
北
舟
筆
霍
喜
板



妙
如
肥

笑
如
肥

笑
如
肥



惟
修
画



山水畫
丁巳年
畫



按ては川をみれば水怪なりて不尋思成のりて其類は後あり
關東もいづくに怪なりと云ふ人々害はかたしと云ふも不辨一豈は
比方なれども多しと云ふ人多く其害と云ふものありと云ふも
りて之漢土の書にも多しと云ふ人々其害と云ふものありと云ふも
不尋思成のりて其類は後ありと云ふも其害と云ふものありと云ふも
不尋思成のりて其類は後ありと云ふも其害と云ふものありと云ふも



河童

豊城の河童
唯小似て毛細
好て相撲と云ふ
も亦人と同じ安
小人同小筋と事
か一筋と云ふ事
街と云ふ事物物
及ぶ事と云ふ事

此水虎の圖は後國抄海土産ものものと云
寛政甲寅一書具に中書寫を云ふ也



脚圖

其類馬のくちも年を度らるりの力もはやく能
人あり入りて婦人となり男子とありて魅せ
らまされたりと云ふものありと云ふものありと云ふものあり

水虎十式圖

説文云網蝸山
川之精物也淮
南子説網蝸云
如三歲小兒赤
黑色赤目長耳
至紡切骨則
枝曰俗作鹿
鹿曰俗作鹿



長七寸手足の指五面へさるのまじく
此は小細毛なり

明和年中本居宣長の書に云ふに水虎は
水虎の類なりと云ふものありと云ふものありと云ふものあり
水虎の類なりと云ふものありと云ふものありと云ふものあり
水虎の類なりと云ふものありと云ふものありと云ふものあり

寛永年間豊後國
肥田と云ふに獲らるる
水虎寫まはるる
水虎の類なりと云ふものありと云ふものありと云ふものあり
水虎の類なりと云ふものありと云ふものありと云ふものあり



水虎

享和元年辛酉六月
初日水戸東濱
中々
水虎
水虎



此二圖を
表裏なり

菅原大明神什物

水虎の害と避るるに菅原大明神の御物なり
水虎の害と避るるに菅原大明神の御物なり



水虎繪巻圖長二尺八寸



此水虎の
表裏の形



把ふ水兵捕村ありと云ふものありと云ふものありと云ふものあり
把ふ水兵捕村ありと云ふものありと云ふものありと云ふものあり
把ふ水兵捕村ありと云ふものありと云ふものありと云ふものあり

菅の季之彦が東谷所見云宋の趙小子或る時水とて有り掛り賣人水とて有り
淡鬼とて伸一人の髪と云ふものありと云ふものありと云ふものあり
水怪の類なりと云ふものありと云ふものありと云ふものあり
水怪の類なりと云ふものありと云ふものありと云ふものあり
水怪の類なりと云ふものありと云ふものありと云ふものあり

紀州 浩雪坂本先生 鑒定
純澤先生 縮圖
東都書肆 林屋文房 潤輝 發見





惟子世宗
公

惟恍尔去



海
山
集
卷
之
三
非





惟此為奇
 雙巴



惜世
公
巴



惟此
巴



卷之二
 世
 二

佛之世宗
画于...





增
 世
 八
 二



明
 神
 宗
 御
 筆
 畫
 卷
 第
 九
 頁

惟此
画



新形三十六怪撰

おもしろい話の巻



明治三十四年八月 東京 丸善堂 刊



是念



猿王





和漢百物語

相馬内裏の古御所に
百鬼の騒ぎあり
天童の山に
大石の怪談あり
附ん其御徳を
の煙を夜に
假名垣齋文記

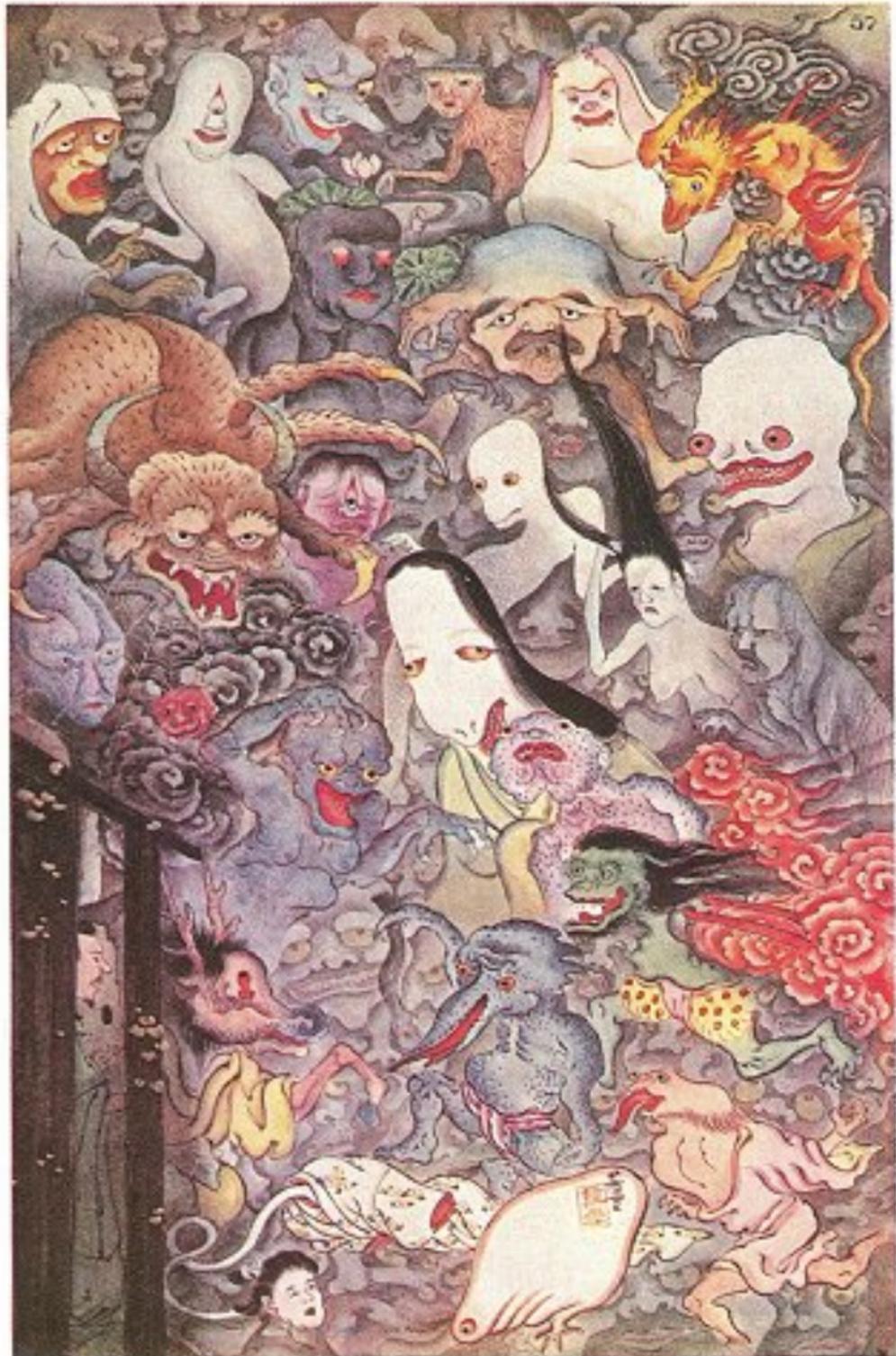
大宅大郎光圀



大宅大郎光圀







Handwritten Japanese text in vertical columns, likely bleed-through from the reverse side of the page. The text is dense and covers most of the page area.





大和の島舟の京はふるふらねたあめい

はげものを最とそ久しく後入あ

宴に羽林者あま

実不口を見あらしきと

一服ゆた始るも

子の刻るこ

おもいほりきり

のあを

おとら

まりあり

すい妖物

きりり

御の

物をくらら

めくの赤子おとりたふ

よりと見えらちりに道に増

いふるす

れい切拵んと太刀に

あふくくらえてぬき

念とおもいとせん

おもひ



Handwritten vertical text in a cursive script, possibly a name or title, located in the upper right corner of the page.



お國の信二人来都よりとて武野野にほひ口喜

世人あくる申乃四阿なをとうら夜ふて

月まよけく花をより月空をあふきみ

うたわの方ま雲た、風まう月、隠れ

ゆいおもとら、牛馬重の中異つれ異つ

飛の首あわねて眼のひらく境の

如ーぬら、信をいん合ぬらじく

そま院ひんをまともへお

いぢり異つたのおそら

いぢり、色ーく

いぢり、青いよき

合らまぢらと

思ひのあ

いつくもーま

えくすとの、ーり

消去ぬ経又会殊のは
みく、映石、眼くは
みん





